九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

エーデルマンの自叙伝: 敬虔主義から啓蒙主義へ

伊藤, 利男

https://doi.org/10.15017/2332686

出版情報:文學研究. 77, pp.1-28, 1980-03-31. 九州大学文学部

バージョン: 権利関係:

エーデルマンの自叙伝

―敬虔主義から啓蒙主義へ―

伊藤利男

された。 ゲーテが生れたフランクフルト・アム・マインで、同じく彼が生れた一七四九年に、次の書名をもつ小冊子が発行

書と聖職者を嘲笑した、あの是正されたヨーハン・クリスチアン・エーデルマンの生涯と著作、出生と家族』 『ワイセンフェルスに生れ、イェーナで神学を修めたが、しかしそれを放棄して、それに代えてキリスト教と聖

ることは、彼にもすぐ分ったであろう。しかし彼はさらにこう考えた。 に付けられた形容詞「是正された」 berichtigt に彼は注意をひかれた。これが「悪名高い」 berüchtigt の誤りであ と中傷にみちた内容を見るまでもなく、彼を刺戟するにはすでにこの書名だけでも十分だった。とりわけ自分の名前 エーデルマンは、この本を北ドイツのハンブルク周辺かあるいはベルリーンで手に入れて読んだと思われるが、偽り との小冊子には著者名の記載はなく、発行年は一七五〇年となっていた。当時官憲の追求を逃れる身であった当の20

エーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ―(伊藤)

「彼(非著者)が表紙の、是正された(berichtigt)」という語をお粗末なIをつかって印刷させたのは、 判をたてられたからといって(中略)、恥じる必要がないことを示すために、それを自分から記述する資格を与いうか、あるいはもっと率直に言えば、私の生涯の注目すべき状況を、それが真実と一致するかぎりは、悪い評 っていることは、私のととがこれまで十分に報道されて(berichtet)きたこと、したがって私は是正されたとい したのか。それともうっかりしていたからか。あるいは無知からなのか。私には分らない。しかし私が確実に知

えられた (berechtigt) ということである」 (傍点は筆者)

筆をおいた。 わえ、事実と合致しない部分は虚偽の記述として指摘して訂正し、さらにその上その小冊子の著者がまったく触れ はその小冊子を一節ごとにそのまま再録して、事実と合致する部分は事実として承認し、必要に応じて補足説明をく ンで書きおえた。五二年一月三日、彼は第一部と同じやりかたで第二部の執筆にとりかがり。同年十二月三十二日に いない事柄についても、注目すべき状況を詳細に記述するというやりかたで、第一部を翌五○年十二月五日ベルリー エトデルマンは「七四九年十一月九日筆をおこして、自分の「生涯のきわめて注目すべき状況」を書き始めた。彼 未完のまま中断された第三部には執筆開始の日付はないが、これは五三年に書かれたようである。

の理由は不明である

文四三九ページに、中断時点から彼の死にいたるまでの経歴の概略一八ページが加えられている。編者クロ て、この手記はハンブルクのC・B・W^クローゼによって右の写本をもとに、若干の注を付して、 されて、それが同地の市立図書館の所有するところとなつた。そして一八四九年、執筆開始後ちょうど一 世 紀 日の目を見ることができなかったが、原稿はなんらかの方法でハンブルクに運びだされて、なんびとかの手で書き写 当時エーデルマンはベルリーンに隠栖していっさいの著作の公表を禁止されていたため、 ーデルマンの自叙伝』という書名でベルリーンにおいて出版された。 エーデルマン自身の手に成る本 この手記はさし当っては ゼのエ をへ

れなかったし、また一つには、この本がもたらすかも知れない害毒を恐れたからである」 を告白しなければならない。一つには、私の名前をエーデルマンの名前と並べることは必ずしも愉快なことには思わ ーゼは前書きのなかで次のように述べている。「私は、この編集を引きうけることに時としてためらいを感じたこと ーデルマンに対する評価は、あのフランクフルト版伝記の匿名著者のそれと本質的に異なるものではなかった。クロ

なくて、ドイツ初期啓蒙主義者として、またレッシングの先駆者としての評価を受けて、復活しようとしている。 イマンによる詳細な解説と注釈を付してふたたび出版された。ここではエーデルマンは、もはや悪名高い嘲笑者では さらに時代はくだって一九七六年、エーデルマンの自叙伝は、右のクローゼ版が写真複写印刷で再現され、

発展のなかに後者の萠芽を見ることの方が、精神史的発展の実際に則しているという私の認識が、ベルントの解説に トゥルム・ウント・ドゥラングを、それぞれたがいに真正面から対立する思潮と見るよりも、むしろそれぞれ前者の 解説を読んだあとも、この意図を変更する必要を感じなかった。というのも、敬虔主義と啓蒙主義、啓蒙主義とシュ 伝の系譜のなかに位置づけ、さらに疾風怒濤期の小説化された自叙伝『アントーン・ライザー』の著者K よってさらに裏づけられたと感じたからである。 リツに対するエーデルマンの先駆的役割を測定しようというのが、私の当初の意図であったが、私は右のベルントの 虔主義的自叙伝の成立と展開を調べている過程で、彼の自叙伝に出会ったからである。この自叙伝を敬虔主義的自叙 エー デルマンの名前を私が初めて知ったのは、十七世紀末期から十八世紀後半にいたる期間に書かれたドイツの敬 Ph • モ 1

ンとは、いったい何者なのか。まず彼の生涯の概略をしるすと、彼は一六九八年七月九日ザクセンのワイセンフェル それでは、その生前悪名高く、死後久しく忘れさられ、そして今ふたたび復活しようとしているエー |ーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ―(伊藤

世を去り、一七二四年エーデルマンは経済上の理由からマギステルの学位をとることを断念して大学を去り、当時ア 全体の雰囲気は乱雑放縦で彼の気に入らず、彼は自叙伝のなかでこの町をソドムとゴモラと呼んでいる。やが 授ブッデウスのもとに集っていたが、エーデルマンも彼を尊敬する学生の一人だった。しかし大学も含めたイェ はじめた。当時イェーナには、かなりな数の宗教的に目ざめた学生が、ルター派の神学者で敬虔主義に理解をもつ教 ・ゼナハに住んでいた父のもとへ帰った。 ーーナ

家では、きめられた授業の時間外には狩猟をしたり、近在各地のカトリック修道院を訪れるなどして、彼は最大限 ところ極端なえせ信心でしかなかった。とりわけ自己神聖視するミュール夫人の厳格主義に自分の自由が圧迫される ーンの富裕な商人ミュールの家へ移った。 自由な生活をたのしむことができたが、三年後には田舎くらしのため自分の学問が停滞することを恐れて、首府ウィ 七二五年彼は友人の世話で家庭教師の職を得てオーストリアに赴いた。最初に勤めた田舎のコルンファイル しかしハレ派敬虔主義を信奉するこの一家に彼が見出したものは、

親戚にあたるアウエルスペルク伯爵家に家庭教師として住みこんだ。 のを感じたエーデルマンは、半年ほど勤めただけでミュール家を去り、 ふたたび田舎へ戻って、 コルンファイ jν

高い敬虔主義者ツィンツェンドルフ伯爵をヘルンフートに訪ねてしばらく滞在したが、しかしそこに見出 した もの たが、これはドレースデンの宗教局が彼に疑惑の目をむける機縁となった。また彼は、 彼のその後の思想上ならびに生活上の遍歴に方向を与えることになる。やがてある貴族の家庭教師として首府ドレー 師の家であったが、ここで読んだ急進的敬虔主義者ゴットフリート・アルノルトの『教会と異端者たちの歴史』は、 スデンに移ったエーデルマンは、授業のかたわら著作活動にとりかかり、一七三五年『潔白な真理』第一部を出版し めにやむなくふたたび家庭教師の職につくことになった。初めに勤めたのは、フライベルク近郊の正統ルター派の牧 たエーデルマンは、 しかし彼の本来の志望はドイツで牧師の職につくことだった。オーストリアに滞在することすでに合計六年となっ 彼の理想を満足させてくれるような救世主像からほど遠い小専制君主の姿でしかなかった。 機会を得てザクセンへ帰ったが、しかし目ざす牧師の職を見出すことができず、生活費を得るた 同胞教団の創立者として名声

払わなかったからであるが、より根本的な原因は二人の宗教上の考えかたの相違であった。エーデルマンが執筆した たからである。しかしハウクとの友好関係は永続きしなかった。その理由の一つは、ハウクが彼に約束した報酬を支 通するようになったフランクフルトの教会離脱主義者アンドレーアス・グロースの仲介で、それへの参加を求められ て、いわゆる『ベルレブルク聖書』の編集事業が進められていて、エーデルマンは、『潔白な真理』出版を通じて文 策によってあらゆる種類の教会離脱者たちが集まってきて住みついたベルレブルクでは、J・F・ハウクを中心にし 『テモテへの手紙・上下』その他の項目は、断わりなしに大修正されて、印刷されたときにはまったく別物になって 七三六年エーデルマンは、ウィトゲンシュタイン伯爵領のベルレブルクに赴いた。伯爵カジミルの宗教的寛容政

|ーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ―(伊藤)

彼はハウクと袂をわかった。

脱者たちの集合地であったウェッテラウに本処を置き、J・F・ロックを予言者として崇拝する異端の一派 それよりさきエーデルマンは、いわゆる神霊感応者たちの一団に接近していた。これはベルレブルク同様に教会離 ~ ある

ク及びその側近たちと対決して――といっても、それははなばなしい論戦ではなくて、ロックの脅迫をまじえた言辞 にしか思われなかった。彼は、これこそ真理であると確信した。この開悟に力をえたエーデルマンは、ほどなくロッ 不安にとらえられた。そういう悩みのうちに、ある日突然彼の心にギリシャ語で、『ヨハネによる福音書』第一章の すことができず、むしろロックの予言なるものに一種の宗教的いかさまを見ざるをえなかった。一派の人々もエー が、ベルレブルク在住のこの派の人々の祈禱集会に出席するようになったエーデルマンは、ここでも神の真理を見出 を平然と聞き流すだけのことだった――勝利をおさめ、神霊感応者たちの集団から自発的に脱退した。 ルマンに不審の眼をむけ、両者の関係は険悪になってきた。まだ宗教的確信をもたないエーデルマンは非常に大きな 「神ハろごすデアッタ」という言葉が聞えてきて、彼にはそれははっきりと、「神は理性である」と言っているよう

友人から送ってもらったスピノザ全集を熟読し、そして一七四〇年には、彼の最も重要な著作と見なされる とができ、また印税の収入もふえて、いわば職業著述家として自立することができた。このころ、彼はベルリーンの われてきた。この友人たちは彼に生活費や出版資金を送ってきたので、彼はささべり職人をやめて著作に専念するこ 攻撃した。彼がこういう苦しい生活を送る一方で、ドイツの各地に彼の著書を読んで彼に共鳴し崇拝する人びとが現 でいたが、経済的に困窮し、ささべり造りの職人の徒弟になってようやく食いつないだ。しかし、それは精神面では モーゼ』を出版した。 充実した敬虔な生活だった。彼は『潔白な真理』の執筆を継続して十三部まで書き、啓示宗教の非合理性をはげしく この集団のなかかちエーデルマンに心服する男女各一名が彼と行動をともにした。彼ははその二人と同じ家に住ん

七四一年、ウィトゲンシュタイン家では伯爵カジミルが死んでその子フェルディナントが新しく当主になると、

部屋を見つけることができなかったからである。 迫られて、二人の同居人は町のなかに何とか自分たちの住居を見出したものの、エーデルマン自身はどこにも適当な ところエーデルマンにとって安住の地ではなかった。というのは、彼らが借りていた家が売却され、彼らは立退きを た彼の二人の崇拝者がやはりハッヘンブルクへ移ってきて、ふたたび同居生活が始まったが、しかしこの地も結局 侶たちは、うちそろって伯爵を訪れて、エーデルマンの追放を要請したが、居あわせた伯爵夫人の熱心な しハッヘンブルクにもすでに彼のキリスト教嘲笑者としての悪名は聞えていた。カトリック、ルター派、 って自分から赴いて、領主の伯爵から居住許可をとっておいたハッヘンブルクにむかって初冬の悪路を進んだ。 えたのち、 領内に住む教会離脱者たちにも重い税金が課されることになった。これを嫌ったエーデルマンは周到な準備をととの との要請は却下され、彼はまずまず平穏にくらすことができた。その間にはベルレブルク時代同じ家に住んでい ある夜半すぎ家財・書籍を積んで百姓だちが索く複数の荷車をしたがえてベルレブルクを脱出してまえも 改革派の僧 に J

いことを条件にして、彼は一七四五年九月信仰告白書を当局に提出した。ところが、 き払ってこの町へ移住してきた(この時点で自叙伝は中断する)。 は伯爵に居住許可を請い、町の状況をあらかじめ検分するため、自分から同地へ旅行したのち、ハッヘンブルクをひ らゆる異端の宗派の人々が住みついて作られた。ライン河畔の町ノイウィートであった。一七四四年、エーデルマン しこで歪曲されて市中に出回ったので、彼はこれをもとの文章に戻し、詳細な注釈をつけて公表することが必要であ を文書にして提出することを要求し、 それ以後のエーデルマンの足跡は、 たたび新たな寄留地をさがす彼の目に恰好の場所と映ったのは、一六三五年ウィートの伯爵の寛容令によってあ 彼は初めはそれを拒否したが、しかし結局、宗教局も彼自身もそれを公表しな おおよそ次のごとくである。ノイウィートの宗教局はエーデルマンに信仰告白 やがてその文章の写しがここか

ると考えた。これが翌四六年発表された『書くことを強要されたが他人にはまた読むことを強制しない信仰告白』

エーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ― (伊藤)

かに退去した。ちなみに、 で、著者として自分が帝国検事局から訴追されることを恐れたエーデルマンは、その年のうちにノイウィートをひそ しかし、この『信仰告白』は『素顔のモーゼ』とともに神を冒瀆する書物として発禁・押収処分を 受 け 押収処分を受けた著書は、一七五〇年ようやく下された判決によってフランクフルトにお 75 Ø

いて公開の場でおごそかに焚書され、同時にその著者は官憲が捜索中の人物であるという宣告を受けた。

た 行なったりしたが、しかし四八年かあるいは四九年になってふたたびハンブルク、またはその周辺地に姿を現わし、 同じ考えをもつ友人たちと交際し、出版を禁止されていたものの、 する声はますます高くなっていたが、プロイセン国王フリードリヒ二世(大王)は彼に居住の自由を与えた。 さらに同じ四九年のうちにまたしてもベルリーンに舞い戻った。キリスト教の嘲笑者としてエーデルマンを非難攻撃 四七年、エーデルマンは招かれてベルリーンに赴き同地の友人の家に滞在し、新しい友人をつくったり、文筆活動を ころブラウンシュワイクで発表された彼への攻撃文に対する反論『聖ハーレンブルクの福音』を出版している。 アルトナ(現在はハンブルクに含まれる)に到着して、とりあえずここに腰をおちつけたもようで、四七年にはその や崇拝者たちのもとにしばらくの滞在をかさねたのち、当時デンマークの支配下にあって信教の自由が許されていた 一七六七年、 、イウィートを去ったあとの彼の足どりには、不明の部分が多いが、彼の進路はまず北へむかい、彼は各地の友人 彼は卒中のためベルリーンで没したが、それを報ずる新聞は、死亡日を二月三日とするものと二月 『素顔のモーゼ』の続篇や自叙伝の 執筆 を続 同じ ij

要約するならば、 出発し、いくつかの異端の宗教をへめぐって最後に啓蒙主義者となる遍歴であった。 以上のように私はヨーハン・クリスチアン・エーデルマンの略伝をえがいてみたが、もし彼の人生を一言でもって それは真理を求めて遍歴する求道者の生涯であった、と言うことができよう。 それは敬虔主義から

十五日とするものの二つに分れた。

も、彼を敬虔主義者と呼ぶことができないからである。その意味でエーデルマンは敬虔主義者ではなかったが、敬虔 あって、もしその人間の生涯のうちにこの再生の過程が認められなければ、彼がどんなに敬虔にふるまった にし て ことは、敬虔主義の神学理論に即していえば、人間が俗世の子から信仰によって再生し神の子になる、ということで ら始まった、という意味であって、彼が敬虔主義であったというのではない。というのも、敬虔主義者になるという それは敬虔主義から出発し、と書いたのは、エーデルマンの思想的遍歴は敬虔主義とのかかわりあい

主義との接触が彼に与えた影響は重大だった、と言わなくてはならない。

学で法律学を学んでいた、のちのヘルンフート同胞教団の大幹部シュパンゲンベルクが、たまたま彼の講義を聴いて 意にもかかわらず』と書いている。現実に見る敬虔主義者ミュール夫妻の信仰の様態は、彼の目には反理性的な迷信 情を説明するくだりである。そこで彼はミュール夫妻の狂信ぶりを述べる際に「私のそのころの敬虔主義に対する好 自叙伝が次に敬虔主義とのををわりあいについて言及するのは、彼がウィーンで家庭教師をつとめたミュール家の事 の響きがあるが、いずれにせよ彼は敬虔主義への好意をブッデウスによって植えつけられたことは確かである。彼の ブッデウス派というか、あるいはいわゆる敬虔ぶる人になった』のである。この「敬虔ぶる人」という言葉には自嘲 の影響をまぬかれなかった。彼は教授たちのうちでは特にブッデウスとその女婿ワルヒを尊敬し、「まもなく熱心な 深い感動をうけ、神学に転じて、ほどなく敬虔主義者になったことからも証明されよう。エーデルマンもブッデウス であろうことは、想像にかたくない。ブッデウスのこの方面における影響力は、エーデルマンとほぼ同時期に同じ大 とくに信仰上の疑惑をもつこともなく、神学を修めて正統ルター派教会の牧師になることを、人生の目標としていた と見られる。そのような彼の単純な正統信仰が、敬虔主義に好意的なブッデウスの講義を聴いて大いに揺さぶられた , しは行動について、自叙伝にはごくわずかな記述しかないが、そのかぎりで推測すると、幼少年時代を通じて彼は 彼が敬虔主義に初めて関心をもったのは、イェーナの学生時代のことと考えられる。それ以前の彼の宗教的関心な

エーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ― (伊藤)

るような、信頼をおける人がだれもいなかった」。こうした状況のなかで彼が出会ったのが、アルノルトの『教会とのを聞いただけで、体がふるえた。私には『自分の疑惑をうちあけたならば、それをとり除いて私を安心させてくれ だった」といい、さらに「私は聖者のように、再生した者のようによそおっていたのだ」と告白している。しかし、 異端者たちの歴史』である。後年フランクフルトの生家で病後を養なう二十歳のゲーテに、「これまで狂気かそれと 義者のその牧師は、彼に「敬虔主義の疑いをかけた」というのである。当時を回想して彼は、「けれども私は偽善者 って、この回りあわせを「神の特別の導き」と考えて、熱心に読書と勉学にはげんだが、それを見て固くなな正統主に勤めた彼は、その教区を所管するフライベルク地方監督がたまたま彼のアルテンブルク時代の恩師であることを知 りにも夥しい没義道と無責任だった。それで私(#エーデルマン)はいわゆる正統信仰が本当に嫌いになり、ますま もって見出したものは、「キリスト教の本当の趣旨を説くのは自分たちだけだ、と自慢している聖職者のがわのあま も背神として教えられてきた多くの異端者についてもっと好意的な観念」を与え、彼が汎神論的世界観を形成する一 かりであったという。「私は人びとがいわゆる無神論者、自然主義者、理神論者、自由信仰主義者などについて話す 敬虔主義の神学理論の根幹をなす再生については、彼はそこに論理的な矛盾を見出し、心のうちには疑惑がつのるば 彼がドイツへ帰ってからいっそう強まることになる。フライベルク近郊でふたたび家庭教師としてルター派牧師の家 への好意に影響を与えなかったと見なくてはならない。 ないしはえせ信心としか映らず、彼はそれに激しい嫌悪を感ぜざるをえなかったものの、 つの機縁となったこの書物のなかに、それより三十数年まえザクセンの田舎で三十歳すぎの家庭教師が最大の驚きを 一敬虔主義への好意とは、裏返していえば正統信仰への反感にほかならない。エーデルマンの敬虔主義への傾向は、 いわゆる敬虔主義者たちのがわに惹かれ始めた。なぜなら敬虔主義者たちは、たしかに彼らなりの欠陥を

もっていても、見うけるところ、正統派の人びとよりもずっと、敬神の生活を送るよう人びとを励ましているようだ

しかしそれは彼の敬虔主義

このように、正統派への反感がいっそう強まって、彼は批判勢力としての敬虔主義にますます惹

きつけられていったのである

いたが、その実状を見て失望し、そしてそれ以後、 とそのいわゆる自己否定についてのすばらしい評判である。彼は伯爵に手紙を書いて招待を受け、ヘルンフー きなかった。そうした折に彼の耳にはいってきたのが、ヘルンフートに同胞教団を創設したツィンツェンドルフ伯爵 スト教徒たちと同じようにふるまう人びとを懸命にさがし求めたが、しかしそれらしい人をだれ一人見出すことがで のあらゆることを行なったのである」「彼は、「本当に正しいキリスト教徒になりたい」という意図から、 教会へはいった。要するに私のドレースデン滞在の最初の半年間、真に厳格な教会キリスト教徒に要求されるかぎり 義者となかば教会離脱主義者である人びとのがわに、より多く傾斜していた」「また宗教生活については次のようにえば、私はまだ四分の三以上はルター派であったが、ただ違う点は、この宗派内で正統主義者のがわよりも、敬虔主 報告している、「私は祈った、私は断食した、私は告解した、私は聖餐を受けた、私は一つの教会を出るとまた次の からますます離反していった。彼は自叙伝のなかで、当時の自分の宗派性を次のように分析している。「 一言 でい ドレースデンへ移ったエーデルマンは、給料の大部分をいわゆる異端書ないしは発禁書の購読にあてて、正統信仰 教会離脱主義者、 神霊感応者などの異端の宗派に真理を求めて遍 トに赴

たび脱出することなく生涯を終っている。 義者となって一生をすごすか、あるいは正統信仰に立ち戻るか、あるいはまた異端の宗派に身を投じてそこからふた 虔主義と接触した宗教人、 エーデルマンの宗教的・思想的遍歴の出発点は、敬虔主義であった。しかし彼と同じ時代、同じように若くして敬 ーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ― (伊藤 知識人が無数にあったなかで、彼の生きかたはきわめて稀な例外である。大多数は敬虔主 たしかに敬虔主義は時代の一傾向としてエーデルマンの思想遍歴への出発

歴する人生が始まるのである。

しかし彼の人生は、彼があらゆる種類の敬虔主義と絶縁することによって、 精神史的意味で大きく 12

動因が、 飛躍前進したのである。とするならば、彼を敬虔主義に固着させることなく、彼の人生を飛躍させるような何らかの 彼の敬虔主義との接触以前に、どこかに潜んでいたにちがいない。それはいったい何か、 またどのように

点とはなったが、

て出来たものであろうか。 この秘密を解明する手がかりを与えてくれるのが、自叙伝である。

エーデルマンの自叙伝は、 たいていの敬虔主義者の自叙伝と同じように、 誕生、 洗礼、 両親の紹介、 幼時教育など

しかしそれを記述する婆勢は敬虔主義者たちのそれとは著しく異なっている。

一例として洗礼

の

項を訳出してみる。

順次記述していくが、

だされた。 いなかったこと、また今でも人びとが無垢な子供たちのなかから懸命になって悪魔を追いだそうと苦労するこの せよ私の両親は、 際に悪魔祓い師の命令におとなしく従ったのかどうか、私は何びとにも確かなことは保証できないが、いずれに お芝居のすべては、こっけいなペテン劇であるということを、 「・・・私は生れてまもなく洗礼を受けて、そして醜い悪魔が通常の儀式によって情容赦なく私のなかから追い 悪魔が表戸から逃げだしたのか、それとも裏戸から逃げたのか、 悪魔が本当に出ていった、と固くなに信じていた。しかし私は、私のなかに悪魔などそもそも 確かに聞き知っている」 私には分らない。 いや、そのとき実

特に宗教上の事柄を叙述する場合には、しばしば自分のその当時の考えかたを現在のものの見かたによって蔽いかく デルマンの合理主義に由来するものであって幼年時代の彼は、両親から自分の洗礼の模様を聞かされて、自分のなか すのである。 から悪魔が追いだされたと信じていたにちがいない。この洗礼の例が示すように、過去を回想するエーデルマンは、 教会の牧師を悪魔祓い師と見立て、洗礼をペテン劇とする見かたは、言うまでもなく自叙伝を執筆する現在のエー

いずれにせよ誕生直後の洗礼が彼自身の記憶にとどめられているはずはない。それに対して、続いて語ら

しかし、

れる次の体験は、彼の記憶に残っているものと見なされる。彼はこう述べている。

時まだ存命していた母、つまり旧姓をブラウンといった祖母のゾフィーから、本当にやさしく愛されていた。 「しかし私は両親から、とりわけ旧姓をハーバーラントといった母のドロテーア・マグダレーナと、その母の当

者は、 いだろう。ゲーテとは対照的に、一七三八年に自叙伝を出版したアーダム・ベルントは、いわば挫折の人生を送ったっていたが、しかし彼の強さが「母に対する関係に根ざしている」というフロイトの見かたには、おおむね異議がな たぐいの言葉を、 ことは稀でない。だからゲーテは自叙伝の冒頭に、『私の強さは私の母に対する関係のうちに根ざしている』という 研究にとってきわめて重要な要素が含まれている。精神分析の創始者フロイトは、一九一七年に発表した『 愛されていたという記憶と、もう一つ自分がりっぱな容姿によって両親を楽しませ喜ばせたという記憶は、彼自身の 元牧師であるが、 分析して、結論としてゲーテの人生の成功の秘密を次のように解釈した。「母親の疑う余地もないいとし子であった 実」中の幼年時代のある思い出』において、ゲーテが自叙伝の最初に語ったいわゆる「陶器こわしの悪戯」の動機を ものであろう。さて、これは一読して何の変哲もない幼年期の思い出のように見えるが、しかしこのなかには自叙伝 親から聞かされてふたたび記憶に残ったものであろうが、幼いエーデルマンが家族から、とりわけ母親からやさしく この回想にはエーデルマンの現在のものの見かたは混っていないと見ていいだろう。 乳離れの記憶は、あとから母 に授けて下さった、生気にあふれたりっぱな姿かたちによって、私の両親の楽しみと喜びとなった」。 きしい母は私に八か月のあいだ滋養分として乳を与えてくれ、その期間がすぎると私は乳離れし、そして神が私 生涯にわたって勝利者の感情、成功への確信をもちつづけるものであり、そしてそれが実際に成功をもたらす 彼の「母に対する関係」をさぐってみると、彼が幼年期に母親の憎まれ子であったことが発見され 当然書いてよかっただろう」「ゲーテ自身は、自分の人生が成功であったなどと言われることを嫌 「詩と真

ーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ― (伊藤)

成功への疑惑をもちつづけ、そしてそれが現実に挫折をもたらした。ということができよう。

なものは、いささかも見当らない。いや、むしろ、あらゆる非難、中傷、攻撃、弾圧にも屈せず、困難や苦境を巧み さて、エーデルマンの人生は世間的な意味では成功とは決して言えないが、しかし彼には挫折者の感情というよう

に切りぬけて前進しようとする気概にあふれている。もし彼が、二十年なり三十年なり後の世に生れていたならば世

ちに、つまり彼が母親のいとし子であったことによって、また、両親から享けたりっぱな容姿に対する誇らかな感情 によって培養されたと言っても、あながち過言ではなかろう。 間的な意味でも彼の成功はまちがいなかったであろう。このような彼の人生態度の基礎は、「母に対する関係」のう

部分はラテン語学習と教師についての叙述である。そのなかで注目されるのは、彼が弟といっしょに個人教授をうけ たウェルニッケという厳格な教師に関するもので、彼は次のように書いている。 エーデルマンの幼少年時代のその後の体験として自叙伝で語られている思い出は、それほど多くはないが、その大

のもとで送りつづけるよりも、いっそのこと両親にたのんで靴屋か仕立屋の職人にしてもらおうと決心したこと ち二人をついにはまったくの勉強嫌いにしてしまい、そして私たちは一番たのしかるべき歳月をこのような怪物 「この児童虐待者は、もし私たちがもっと長いあいだ彼の答のもとに留まらなくてはならなかったならば、私た

であるう。しかし慈悲深い神の先慮は、私たち二人に関して別の決定をくだしたまい、私たちは一七一一年、両

入れられた」 33 名の移転したとき、この獄吏から解放され、ザンガーハウゼン到着後ほどなく町の公学校へ親がザンガーハウゼンへ移転したとき、この獄吏から解放され、ザンガーハウゼン到着後ほどなく町の公学校へ

「毒をもって仕返しすることもできたかも知れない」ほどの激しい敵意をいだいたことを告白している。エーデルコものであって、たとえばヴュルテムベルク派敬虔主義の代表的神学者エーティンガーは、そのような教師に対して、 きびしすぎる教師に対する少年の、生涯忘れることのできない憎しみは、この時代の自叙伝にはしばしば見られる

ーデルマ

原型がこの願望のなかに見出されるのである。 ンの憎悪は、 まうまで徹底的に戦かおうとするのではなくて、 自分の行く道を見つけだしたいと願ったのである。 それほど真正面からの過激なものではない。彼は、できることなら教師の答のもとから脱出して、 そとから脱出して他に生きる道を求めていったやりかたの、 彼が後年何らかの困難な現実に遭遇した場合、それを除去してし いわば 他に

ろの神がそれぞれで異なる点である。敬虔主義者の神はキリスト教の神であり、エーデルマンの神は理性である。 ば 立場にあるエーデルマンが、人生に起こる諸事象の因果関係を考えるとき、今なお敬虔主義者と同じような先慮信仰 に支配されていることを示していると言えよう。 いわずらわせはしなかった」ということになるのである。このような「先慮」の頻用は、すでに敬慮主義を批判する てやることによって、下宿料が半分ですむことになった。そこで、「慈悲深い先慮はこのたびは私にそう長いこと思 あててしまうなどして、経済的に困窮していたが、たまたま知人からたのまれて一人の学生を自分の部屋に同居させ あらわれる。たとえばイェーナで学生生活を始めたばかりのエーデルマンは、 たというまったく世俗的な理由からにすぎない。 エーデルマンの場合も、一家が移転して、したがって彼が教師の答を逃れることができたのは、 上に変化がおこった際、その原因を「先慮によって」という言葉で好んで言いあらわした。今日の言語感覚からすれ たちは、 右に引用した記述でもう一つ注意しなければならないのは、 「たまたま」と言うべきところで、しばしば「先慮によって」という表現が用いられるのである。 - 人間の歩みは神の先慮によって正しい目標に導かれると信じていた。したがって彼らの自叙伝では何 ただ一つ区別しなければならないことは、その先慮が由来するとこ 彼の自叙伝中には、このほかにもかなり頻繁に「先慮」という語が 「慈悲深い神の先慮」という言葉である。 持参した僅かばかりの金を本の購入に たまたま父が 右に引用した 転勤 か一身

敬虔主義者たちの自叙伝を読みなれた者にとって、

エーデルマンの自叙伝の目新しさは、

キリスト教およびその教

たエーデルマンは大いに作詩の腕をみがいた結果、級友のなかの貴族の子弟のために詩を作ってやって、その報酬と であった十七歳とろのもので、当時との学校では生徒たちのあいだに詩を作ることが流行していて、それに刺戟され 人を置いたという記述も、すでにその一例であるが、一番先に書かれている例は、彼がラウバンの古典語中学校生徒 会に対する辛辣な批判のほかに、経済生活に関係する詳細かつ卒直な叙述である。 右にあげたイェーナで自室に同居

して二、三グロッシェンの金を手に入れることができるまでになった。以下、直接引用すると、

らず私は詩人になることはできなかった。けれども私は今日にいたるまで詩と、詩の魂である音楽を愛している いれ、そして一つの主題を時には五通りから六通りもの詩に仕立てあげたものである。しかし、それにもかかわ もらっていなかったが、その金が詩を作ることによって手にはいることが分ったので、私はいっそう作詩に身を し、昔は音楽ではピアノとフルートをつたなからず奏したものだ」 「私はその当時親類の家ですべて無料でまかなって貰っていたので、実家からは無に等しいほどの金しか送って

に数グルデンをもたらし、さらに級友たちのあいだで私は大きな信用を博するにいたった」のように回想する。「これらの家庭教師の仕事は、私の勤勉にますます拍車をかけたばかりでなく、三か月ごとに私 が書いたものが金になるということを知ったからである。ラウバン時代の彼はさらにひとに頼まれて家庭教師をした り、自分よりも年長の貴族の青年の復習教師をして若干の収入を得ることができた。このような仕事について彼は次 は、後年の職業著述家――ノイマンによればドイツで最初の職業著述家――エーデルマンは、このとき初めて、自分 ことによって手にはいることが分った」ということは、エーデルマンの将来にとって意味深い体験である。というの この回想の主題は明らかに作詩であって、経済生活は副次的に語られているにすぎないが、しかし「金が詩を作る

すでにラウバン時代、彼は叔父の家で、年長の粗暴な若者を同室者にもっていたが、ちょっとした諍いからこの男に 青少年期のエーデルマンにとって、右に紹介したような金儲けの話よりも遙かに重要なのは、 貧乏の体験である。

たが、逆に叔父から、年少の者は年長者に譲歩すべきだ、とたしなめられた。相手は彼をますます見くびって嘲笑し 顔をひどく殴られるという事件があった。彼はこの一件を叔父に訴えて、少くともその男から謝罪をかちとろうとし 「しかし私(=エーデルマン)は叔父から扶養されている身であるがゆえに(中略)、その苦痛をかみ殺した」

断念し、ワイセンフェルスの専修学校で我慢しなければならなかった。そのときの気持を彼は次のように述懐する。 なかったからである。エーデルマンはアルテンブルクの古典語高等中学校を卒業したものの、さし当って大学進学を のである。エーデルマン家の貧乏の原因は、公爵家に仕える父親が何かの理由で長年にわたって給料を払ってもらえ

る若者だが、ときには無理難題もいう親方のもとで徒弟奉公することだって、恥ずかしくない」 に献上されるよりも、まともな手職を習わせてもらった方がよかった、自分はまもなく二十二歳にもなろうとす ふたたび窒息してしまいそうな傾勢となった。私は何千回となくこう思った。自分は両親からいまいましい学問 「私がこれまで大学を目ざして重ねてきた努力と熱意のすべては、それがまさに花開くか開かないかのときに、

大きな黄色のしみに変化して、その服はもう人前に着てでることができないしろものになってしまい、彼はすっかり とることができるということを見聞していたので、さっそくこの方法を応用してみたところ、インクのしみはもっと けられて、その服に大きなしみがついてしまった。彼は、こんな場合衣服についたしみをレモンの汁できれいに拭き ふさぎの虫にとりつかれてしまった、というのである。 ルスの専修学校時代、彼はたった一着しかない服をだいじに着ていたが、ある日級友にうしろからインクをふりか 彼は貧乏がもたらす悲喜劇をいくつか実に写実的にえがいているので、その一例をここに紹介すると、

について次のような感想が見出される。 そこで注目すべきことは、エーデルマンが貧乏をどのように受けとめているか、という問題である。

|神の先慮がワイセンフェ エーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ― (伊藤) ルスとそのあと イェーナで、 私にこうも窮屈な 苦しい 生活をさせたもうたのは何故

現われたならば、私はきっと愛欲におぼれてしまったにちがいないだろう」ば)、もしも私に、ジュピターがレダにしたように、黄金色の雨を注ぎかけることができるような愛欲の対象が たもうたからだ、という以外には何の理由もまず見出すことができない。さもなければ(=貧乏でなかったなら か、ということをよくよく考えてみると、先慮がそうすることによって私を愛欲におぼれることから守ろうとし

造主のやさしいお導きによって、アイゼナハからの帰り道、ゴータで愛する人との再会をたのしむ」ことができた彼したであろうことを否定しない。しかしこのたびは、愛は理性に屈服しなければならなかった」(そして、「私の創 明らかであるが、 よって、たがいに愛の言葉をかわすなどの事態にまでは進展しなかった。そこで彼は、「愛する母が死とたたかって その途中立ちよったゴータの親戚の家で、初めて会ったこの家の娘を心憎からず思った。彼は次のように告白する。 験はあった。イェーナ時代の終り近く、彼は当時両親が住んでいたアイゼナハに重病の母を見舞うべく旅行したが、 キリスト教徒にふさわしい結婚を禁止するものではない。エーデルマンは終生独身であったが、しかし彼にも恋愛体 てくれたという考えかたは、つまりは彼の禁欲主義を証明するものであろう。禁欲主義もまた敬虔主義の生活訓の一 るのである。 いるときに、私が官能的な喜びを味わうなどということは、たぶん天の神のお気にめさなかったのであろう」と考え は、彼女と前回よりも親しく口をきいたけれども、二人の仲は、彼自身の言うところによれば、周囲のひとの妨害に つであるが、しかしそれは物欲、金銭欲、立身出世欲というような世俗的欲望に関する禁欲を要求するのであって、 「私はもしその時、礼儀正しいやりかたで愛にところを得させることができたならば、彼女ともっと打ちとけて話を 貧乏もまた神の先慮である、とエーデルマンは考えるのである。そして、先慮が彼を愛欲におぼれることから守っ 右の例に見られるエーデルマンの愛についての考えかたには、たしかに敬虔主義的な禁欲主義の影響が しかし愛についてのこのような率直な告白は、本来の敬虔主義者たちの自叙伝にはほとんど見られ

ないものである。

然の帰結と見ることができよう。 が新しく課せられることになった税金を嫌って、ベルレブルクを夜逃げしたのも、 でいく上に、大いに役だつことになるのである。経済学的な視線とは、つまりは一つの合理主義にほかならない。 証拠であろう。このような経済学的視線は、 の中を少しばかり見てまわりたいという気持」に促がされたのと同時に、 う酒その他の農産物による年収を見積って、その豊かさに驚いているのも、 アでは近辺のカトリック修道院をいくつか訪問したが、その際その修道院の経済について、 を経済的側面から観察する眼を養なったであろうことは想像にかたくない。 ことでふたたび観察をエーデルマンの経済生活に戻すと、彼が家庭教師となってオーストリアに赴いたのは、 赴任に際して彼は、 旅費の工面にまたしても苦労しなければならなかったが、そういう苦労を通じて彼が世の中 ベルレブルク時代以後、彼が独立した職業著作家として生活をいとなん また生活上の 必要に 迫られた 彼がすでに経済学的な視線をもっていた 略伝でも触れたように、 まさにこの合理主義的な計算の当 修道院領からあがるぶど 彼はオー からでもあ ストリ 一世

三昧にくらしているのだ」(このような社会あるいは教会への批判は、ほかにもこの旅行とオーストリア滞在の叙述では、教会のなかの死んだ聖者たち(=聖者像)は金や銀をぴかぴか着飾り、その奉仕者(=僧侶)たちはぜいたく は、 にしばしば見られるが、もう一つ注目すべきは、自然の世界に対するエーデルマンのかかわりあいである。 ルクの町へ入るときと出るとき、五十人ほどの乞食の群にとりかこまれて前進できなくなり、 た小銭をぜんぶこの哀れな人びとに分け与えて、やっと馬車は通過することができた。そこで彼は言う。 オーストリアへの道程にはドーナウ川をくだる船旅が含まれていたが、 貧乏ゆえに養なわれた合理主義あるいは現実主義は、社会を見る眼にも波及してくる。 エーデルマンに実にさまざまな体験見聞をもたらしたが、その一例を紹介すると、彼が乗った乗合馬車がバンベ エーデルマンは それを 次のように オーストリアへの赴任の旅 乗客はみな持ちあわせ 「その一方 描写す

I

る

20

祭にはさまれた時期であったということのほか、 わる町や村、 「船旅そのものは、はなはだ快適だった。というのも、それは一年で最も美しい季節、つまり復活祭と聖霊降臨 修道院、 城館、山、畑、森、 牧場、 川の両岸に現われてくる気持よい風景と、いわば刻一刻移りか 草原、藪の新しい景観が、眺める眼に絶えまなく限りない快適

ょに坐っているように言われていたにもかかわらず、いつも甲板に出て腰をおろしていた」 つり変るのをまだ見たことのなかった私は、このすばらしい機会を利用して、船室のなかで他の人びとといっし 故郷の本当にやっぱり美しい景色のほかには、このように多くの自然の美がいちどきに現われて、千変万化う

な楽しみを与えてくれるからであった。

いささかの感動をもって眺めた、恐らくただ一人の人間であっただろうと」 ちの自叙伝には、ほとんど見られないものである。それでは、 その自然とは エーデルマンに とって 何を意味するの このように自然の美を心ゆくまで楽しむという情景もまた、ひたすら自己の内部に観察の眼をむける敬虔主義者た 彼は次のように書いている、 「私はこう言うことができる、自分はこの船のうえで、神のこのすばらしい作品を

途中、 しさを神の啓示と見て、次のように述べている。 ドイツへ移住することになったコルンファイル伯爵家の傭い船に便乗したのであるが、その船上で体験した自然の美 アに着いてから、この詩集を買って熱心に読んだというが、六年間のオーストリア滞在をおえてザクセンへ帰る旅の 乗るまえにすでに旅の道づれとなったある紳士からブロッケスのこの詩集のことを聞かされていたので、オーストリ 自然を神の作品と観る彼の見かたは、ブロッケスの『神による地上の楽しみ』に大きく影響されている。彼は船に自然を神の作品と観る彼の見かたは、ブロッケスの『神による地上の楽しみ』に大きく影響されている。彼は船に やはりドーナウ川の船上でふたたび自然の美に深い感動を味わった。彼はこのたびは旅費を節約するために、

仰書のなかから読んで聞かされた、旧約あるいは新約聖書のいわゆる啓示についてしかじかの説教師たちが語っ 一少なくとも、 神のこのようなすばらしい啓示は、月曜日でとに伯爵の船で行なわれたいわゆる礼拝で、 古い信

たとかいう夢物語なんぞよりも、はるかに大きな感動を私に与えてくれた。もっとも私はそれと同時にまだ、そう のなかでブロックス氏が、自然という神のすばらしい、何の歪曲もうけていない啓示をうたった二、三の詩句か いう種類の神の啓示に対しても尊敬を払っていた。とは言っても、私が熱心に読んだ『神による地上の楽しみ』 のことを、私に言おうとしているのだ、と私は感ずることができた」・すでに私の心はたいへん深い印象を与えられていたので、自然は、私が今やっと理解できるよりもずっと多

未熟ではあったにせよ、神の啓示をひたすら聖書のなかに 求める 他の敬虔主義者から 彼を区別する 目印と言ってい このような、自然のなかに神の啓示を見ようとするエーデルマンの自然観は、三十歳前後の彼においてはまだまだ

の悲惨から救いたまえ」と心情の叫びを発した瞬間、心の疑惑はいっさい吹きはらわれ、代って信仰が彼の心をみた 聖書解釈学の研究を通じて、つまり理性の立場から、信仰の不可欠性を知りながら、しかし自分自身の心のなかを覗い めないのである。その無信仰ゆえの不安と絶望のあまり、自己を完全に空しくし、神のまえに身を投げだして、「こ てみて、そこにあるのは神への疑惑ばかりで、信仰のかけらもないことを発見する。信仰が理性に妨げられて入りこ なろう。敬虔主義者の回心の最も典型的な例として知られるのは、フランケのそれである。二十四歳のフランケは、 対決を前にして行なわれたのであるが、これを敬虔主義者たちの回心と比べてみると、その特徴がいっそう明らかに 割愛せざるをえない。この回心は、すでに略伝のなかで紹介したように、いわゆる神霊感応者たちの首領ロックとの みからは、紙数の制約から、ただ一つ彼の開悟、あるいは別の言葉でいえば回心についてのみ考察して、他はすべて 以上、 彼は全身に「歓喜の奔流を浴びせられたかのごとく」に、平安と慰藉を得たのである。一方、エーデルマンの回 - 私はエーデルマンの三十歳ころまでの人生において注目すべき状況をいくつか挙げてきたが、それ以後の歩

エーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ― (伊藤)

ちを、ひどく疲労困憊させ、私たちは食べることも飲むことも忘れて、まったく情ない状態におちいった」。 たので、私はだれかがそう話しかけ、力をこめて『神は理性である』と言っているようにしか思われなかった」。 その瞬間、 うな「まことの地獄の不安」ゆえの疲労と衰弱のためエーデルマンは睡眠におちいり、そして、 ちその神自身に敵対するというようなことになった場合の、恐ろしい裁きを怖れなければならなかったからである。 不安の原因を次のように分析している、「この不安の原因は(中略)、私たちが三人とも、私たちのすぐ近くにいる生 どの不安におちいった。からである。この不安は、彼に味方する二人の友人にも共通するものであったが、彼はこの 心もまた不安のうちに準備されたと見ることができる。というのも、神霊感応者たちの首領ロックとの対決を二、三 して彼は、 こういう考えはそれ自体では取るにたりないものではあっても、そのころ他に光明をもたなかった私たち哀れな者た きた神をいまだ知らずに、いつも神を私たちの外部に求めて、そしてもしもその神の使者に敵対することが、すなわ 日後にひかえて、彼は対決の相手を宗教的いかさま師ではないかと疑ってはいたものの、なおかつ、「自分が相手に しているのが神なのか、それとも悪魔なのか、まだ確信がもてないで、生命にもかかわるのではないかと思われるほ てのよ

神の裁きを恐れなければならない――を棄てて、物事を正しく批判する理性を思考と行動の基準として神格化するこ は、 向と次元においてはまったく異っている。というのも、 フランケの 回心はあくまでも 一個人の心情の 範囲内におけ この日は自分たちの誕生日にほかならないと考えるのである。 フランケの回心とエーデルマンの開悟は、その経過においてはたしかにある程度似かよっているが、しかしその方 まさに敬虔主義の神学が要求する 「再生」 であるのに対して、 そのような心情の立場——そとに立つかぎり彼は、彼から見て迷信らしく思われるロックの予言を信じて、 それまでに何百回となくギリシャ語原典で読んだその言葉に、今初めて慰められ元気づけられて、そして ョハネによる福音書のなかの『神ハろごすデアッタ』という言葉が私の心のなかにはっきりと聞こえてき 「神は理性である」 というエーデルマンの開悟 「不意に目がさめた その

とにほかならないからである。そういう理性が、 彼が開悟したのではなくて、すでに青年時代から貧乏ゆえのさまざまな生活体験のうちに養なわれてきたこと あるいは別の言葉でいえば合理主義がある日突然エーデル

すでに見たとうりである。

りの山や谷を散歩して、 神霊感応者の一派を脱退して、今やあらゆる宗派から自由になったエーデルマンは、友人たちとともにあた 「神を自然のなかに観察する」ことに大きな慰藉を味わった。 彼はこう書いている。

は数限りなかった」
この、私たちから神に捧げるよりも、 で創造主を賛美するよう励まされるような快適な感情がわいてくることから、まもなくそれを知ったのである。 かし、しばしばあらゆる感覚がいちどきにいとも甘美に揺り動かされ、心がそれをとりかこむ厳かな静寂のなか 私たちは最初は、 それが最も善い最も有益な最も楽しい神の奉仕(=礼拝)であることを知らなかったが、 神から私たちにずっと多く示される奉仕において、私たちが味わった変化

に、 汎神論的な世界観の萠芽を認めることは、それほど困難ではないであろう。 こは理性であると悟って、その神の理法を 自然のなかに 観察できるようになった エーデル マンの 心の変化のうち

仰、これらをすべて完全に否定する彼の思想は、キリスト教会およびそれを支配機構の一翼とする当時のド 家体制にとっては、最も危険な思想として受けとられざるをえなかったことは想像にかたくない。自叙伝以外には彼 ト教徒にふさわしい信仰を見出そうとした敬虔主義、それより急進的な教会離脱主義、 『素顔のモーゼ』その他の著作を読む機会をまだ得ていない私には、その辺のことに詳しく言及する資 格 「神は理性である」という命題がキリスト教の根本教義にどの程度反するものか、 エーデルマンはこの開悟によってキリスト教と断絶せざるをえなかった。正統信仰に対抗して、 ーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ― (伊藤) キリスト教徒でない私には分ら あるいはまた神霊感応者の信 よりキリス ・イツの は ない

が、 しかしそのような反教会的・反体制的思想家エーデルマンになおかつ敬虔な――敬虔主義的でない――宗教性を

認めざるをえないのが、彼の自叙伝に対する私の読後感である。

最後に付言したいことは、エーデルマンがこの自叙伝を書いた動機についてである。たしかに彼は自分を中傷する

伝記に刺戟されて自己の思想の正当性を主張すべく筆をとったであろうが、しかしその伝記はあくまでも一つのきっ

かけになったにすぎないのではあるまいか。彼は自叙伝の冒頭にこう述べる。

私のこと、私のふるまいについて、何を言おうと言うまいと、それはどうでもいいことであろう。神をまえにし 行動したのではない、ということを証言してくれるならば、私は(中略)、私の生涯をあらゆる喜びをもって終 て良心の慰めがあれば、また理性的な徳を愛する人びとが、私は私の生涯において人間社会の無用な一員として ら非難すべき一点もなきよう律することに努めてきたので、人間的事象の空しさを考慮するならば、後世ひとが って行動し、人びとがどんなに本気になって私の良心を否認しようとも、私のいっさいの行動を、顧みてみずか 「私は、私の理性を働らかせつづけ、青春時代の放縦を克服したのちは常に神に対する私の良心の証言にしたが

なかろうか。 対する怒りとか、自己正当性の主張とかを超えた、わが人生に対する満足の予感とも言いうるものであろう。そして 終ったところで、初めて書かれたのではないかと想像されるが、ここに見られるエーデルマンの心境は、世の中傷に この冒頭部分は、他の多くの自叙伝がそうであるように、本文をある程度書き進んだあと、たとえば第一部を書き 「生涯の注目すべき状況」をあますところなく書き進んでいくうちに、おのずから心中に湧いてきたのでは たしかに彼の自叙伝は、社会の一員としての公けの弁明と自己正当性の主張を多く含んでいるが、

し同時に、それとは直接関係のない、きわめて私的な体験、感想の告白をも行なっている。こうした告白のうちに、

が、 をしてこの長大な稀有の自叙伝を書かしめた真の動因である、と私は考えるのである。 的な営みではなかろうか。すでに見たように、たしかに彼は、 彼は自分の本当の姿をあらためて発見したのであろう。それは貧乏に苦しんだ自分であり、また自然の美に感 自分である。そういう自分を率直に語るということは、それはたとえ詩形式をとらなくても、より大きな意味では詩 しかし彼は人生告白するとき無意識のうちに詩人になっていたのだ。この詩人としての魂こそが、エーデルマン 「私は詩人になることができなかった」と書いている 動した

共通性が認められるものの、なお全体的には、他日稿を改めて詳細に比較検討したい) の意図、つまりモーリツの先駆者としてのエーデルマンの評価については、特に社会的・経済学的視線において この自叙伝が敬虔主義者の自叙伝の伝統のなかで、形式や論理のうえではいくつかの敬虔主義的要素を含みなが (エーデルマンの自叙伝を敬虔主義的自叙伝の系譜のなかに位置づけるという、本稿の当初の意図については、 その内容と精神においてはその伝統を超えて、大きく近代に接近したという結論が引きだせよう。もう一つ

注

- 1) christlichen Religion, der heiligen Schrift und der Geistlichkeit ergriffen. Frankfurt 1750 in 8 Weißenfels gebohren und in Jena Theologiam studiret, solche aber verlassen; dargegen die Spötterey der Des berichtigten Johann Christian Edelmanns Leben und Schriften, dessen Geburth und Familiae, welcher in
- 2) 3) 著者は続編ではこのように訂正している。 著者はブレーメンおよびヴェルデンの地方総監督牧師 Johann Heinrich Pratje (1710—1791) .
- エーデルマンの自叙伝―敬虔主義から啓蒙主義へ―(伊藤)

- 4) Johann Chistian Edelmann Selbstbiographie, Faksimile-Neudruck der von C. R. W. Klose veranstalten Ausgabe Berlin 1849; neu herausgegeben, kommentiert und mit einem Nachwort versehen von Bernd Neumann
- Stuttgart-Bad Cannstatt 1976. S. 3.

5)

ノイマンによる。

- 6) Joh. Chr. Edelmann's Selbstbiographie. Geschrieben 1752. Herausgegeben von Dr. Carl Rudolph Wilhelm Klose
- Berlin, Verlag von Karl Wiegandt, 1849.
- 7) Edelmnn Selbstbiographie, S. III-IV.

8)

注4)を参照のこと。

- 9) Karl Philipp Moritz: Anton Reiser. Ein psychologischer Roman. 4 Bde. 1785-90
- 10) Johann Franz Buddeus (1667-1729).
- 11) auf das Jahr Christi 1688. 1699 u. 1700 Gottfried Arnold: Unpartheyische Kirchen- und Ketzer-Historie, Vom Anfang des Neuen Testaments Bis
- 12) Edelmann: Unschuldige Wahrheiten, 1735-43
- 13) Nikolaus Ludwig Graf von Zinzendorf und Pottendorf (1700-1760).
- 14) Johann Friedrich Haug (?-1753).
- 15) Andreas Groß 生殁年不明。

Johann Friedrich Rock (1678—1749)

16)

- 17) Edelmann: Moses mit aufgedecktem. Angesichte

Edelmann: Abgenöthigtes, jedoch Anderen nicht wieder aufgenöthigtes Glaubenbekenntnis

18)

- 19) Edelmann: Evangelium St. Harenbergs
- 20) genannt Joseph, von ihm selbst aufgesetzt, in: Archiv für die neueste Kirchengeschichte, ed. H. Ph. C. Henke Bd. 2 (1795), S. 434 f. 参照のこと。 August Gottlieb Spangenberg (1704—1792): Lebenslauf unsers seligen Bruders August Gottlieb Spangenbergs,
- 21) Edelmann Selbstbiographie, S. 39

- 22) a. a. O., S. 90.
- 23)
- 24) a. a. O., S. 123 a. a. O., S. 124
- 26) 25) a. a. O., S. 128
- Goethes Werke Bd. 9, Hamburg 1955, S.
- 28) 27) a. a. O., S. 138. Edelmann Selbstbiographic, S. 131.
- 30) 29) a. a. O., S. 6. a. a. O., S. 139.

31)

- Sig. Freud: Eine Kindheitserinnerung aus "Dichtung und Wahrheit" in: Gesammelte Werke, 12. Bd. London 1947, S. 26.
- 32) Adam Bernd (1676-1748).
- 究」第七十六輯 昭和五十四年 99-13ページ)を参照のこと。 彼の人生については伊藤利男『アーダム・ベルントの自叙伝

一敬虔主義の心理学』

(九州大学文学部紀要「文学研

Edelmann Selbstbiographie, S. 7 f.

33)

34)

- Friedrich Christoph Oetingers Selbstbiographie Geneaologie der reelen Gedanken eines Gottesgelehrten, hrsg. von J. Roessle. Metzingen 1961, S. 20.
- 35) 34) Edelmann Selbstbiographie, S. 32.
- a. a. O., S. 13. a. O., S. 20.
- 37) 36) a. O., S. 17.
- ည O., S. 23 f.

38)

- 39) a. O., S. 24.
- 40) a. O., S. 45.

- 42) a. a. O., S. 46.
- a. a. O., S. 49
- a. a. O., S. 62 f. a. O., S. 55.
- a. a. O., S. 63.
- August Hermann Francke: Werke in Auswahl, hrsg. von Erhard Peschke, Luther Verlag. 1969, S. 14. Edelmann Selbstbiographie, S. 119 f. Barthold Heinrich Brockes: Irdisches Vergnügen in Gott, 1721.
- Edelmann Selbstbiographie, S. 272.

フランケの回心については伊藤『アーダム・ベルントの自叙伝』(注記)参照のこと。

a. a. O., S. 272 f.

a. a. O., S. 273.

a. a. O., S. 1. a. a. O., S. 300 a. a. O., S. 274.